

University Tennis Team, the comparison of how the first-string players and the rest of the players work on a group goal.

1K09A037

指導教員 主査 奥野景介 先生

岩崎 舞

副査 坂井利郎 先生

【目的】

テニスの団体戦において、部員の気持ちが一つになり、同じ方向を向くことは、強いチームをつくるために欠かすことのできない大切な要素である。チームを構成する選手のレベルにばらつきがあり、試合出場に関しても、異なる立場の人間が混合する W 大学庭球部において、全員が同じ目標に向けて競技に接することは難しい可能性が示唆される。

これまで、数々の競技でチーム力を高めるにはモラルが必要であることは証明されてきた。しかし、強いチーム内の各選手のモラル調査の研究は競技的スポーツ集団での先行研究はあるものの、硬式テニスでは、未だなされていない。また、時期をわけてモラル調査を行った先行研究も筆者の知る限り成されていない。そこで本研究では、試合 1 ヶ月前と直前の 2 回にわたり、レギュラーと非レギュラーにおける集団目標に対する取り組み方が同じであるかどうかを、竹下、丹波 (1967) らが作成したモラル調査によって明らかにすることで、チーム全体や競技レベル別でのモラルと、そのモラルの変化を検証し、モラルを高めている、或いは、低めている原因を見出し、部員全員が同じ気持ちで目標に向かう等の大学部活動のチーム作りの現場における基礎的資料を作成することを目的とした。

【方法】

① 調査対象

早稲田大学女子硬式庭球部員 28 名 (レギュラー 8 人、準レギュラー 7 人、ノンレギュラー 13 人) を対象とした。

② 調査期間

2012 年 9 月 12 日 (レギュラーとノンレギュラーが決定する日) と 2012 年 10 月 21 日 (全日本大学対抗テニス王座決定試合前日) の 2 回にわたり、調査を行った。

③ 調査内容

竹村、丹羽らが作成した、20 項目のモラル調査質問紙を使用した。対象者には、それぞれの質問に対し、5・4・3・2・1 の 5 段階の中で、最も近いものを 1 つ選んでもらった。

④ 分析方法

それぞれの調査結果に対して Kruskal Wallis 検定を使用し、分析を行った。有意確率は 5 パーセント未満 ($P < 0.05$) である。

分析結果をもとにレギュラー・準レギュラー・ノンレギュラーのモラル調査の結果と、リーグ後から王座直前のモラルの変化を検証し比較を行った。

【結果】

リーグ後と王座直前の全体、そしてレギュラーと準レギュラー、レギュラーとノンレギュラー、準レギュラーとノンレギュラーの比較において、有意差は認められなかった。しかし、有意差はなかったものの、レベル別での、モラルの値に差が生じた。

リーグ後と王座直前でのモラルの変化については、準レギュラーとノンレギュラーの変化には有意差は認められなかったが、レギュラーと全体の変化には有意差が認められた。

【考察】

今回の調査結果からレギュラーと非レギュラーのモラル、すなわち集団目標に対する取り組み方の違いに少なからず差が生じているということが示された。そして、そのモラルを高めている、或いは低めている要因に、適応感と達成感、目標設定が挙げられる。

目標設定については、全ての競技レベルにおいて、「集団目標に繋がるような個人目標の設定」と「より明確な目標設定」をすることがモラルを高めるために非常に大切であると考えられる。また、適応感については、自分の能力や意思を認識し、その限られた環境の中で、自分なりに目標を設定し、その目標を達成するための計画を立てる柔軟性がモラルを向上ないし維持することが出来ると示唆される。そして、練習や自分自身で設定した目標をクリアすることで得られる達成感も、モラルを高める一要因であると考えられる。

以上のことから、これらの全てが、理想の強いチームをつくるために大切な要因であるということが示唆される。